

社会変化、女性の地位、都市形態と発展のモデル

パット・バーネット*
(吉田 雄介** 訳)

Pat BURNETT

Social Change, The Status of Women and Models of City Form and Development
Antipode, 5-3, 1973, pp. 57-62
© 1998 Blackwell Publishers

本稿の目的は、地理学における都市成長モデルが大きな社会変化の分析には不適切であるので、説明や、予測、規定のために（たとえ、どのように定義するとしても）限られた力しか持たないことを例証することにある。わたしたちが意味する大きな社会変化とは、西側都市工業社会において、例えば性差別¹⁾、人種差別、および貧しい階級の永久的根絶をもたらすに違いない類いの持続的な変化なのだ。

ここでの議論のためには、人種差別、性差別、ないしは物質的な貧困を根絶することが、都市システム内部でそれらが表明されているか否かという問題とともに、「望ましい」のか、「経済的に可能」なのか、あるいは「政治的に実現可能」なのかといった議論は必要ではない。都市形態と発展についての主要な諸モデルは、都市空間システムのパラメーターが変化する様相にたいして十分な注意を払っていないことを示すだけで事足りるのである。ここでは、こうしたパラメーターは、社会の構造的関係によって生み出されると理解される。例えば、階級、性や人種による労働、所得、およびモビリティ（例えば、自家用車へのアクセス）の社会的分断が、都市の所得分布や労働者のプール、都市のアクセシビリティといった諸条件を生み出し、それは都市の形態と発展にとっての制御パラメーターとして認識される。

西側工業社会の構造的関係が安定的であり、過去においてもそうであり、将来もそうだろうという史的な

証拠は存在しない。実際のところ、まったく正反対である²⁾。また、都市システムのパラメーターにも安定性を示す根拠は認められない。それゆえ、本論文の最初の部分では、都市構造に関する、エントロピー最大化モデル、シミュレーションモデル、付け値地代モデル、および因子生態モデルを分析する。そして、それらが、都市空間システムにたいして及ぼす現在進行中の社会的に引き起こされたパラメーターの変化の影響に関する疑問に答えていないことを明らかにする。ここで事例として検討されるパラメーターは、社会における男女間の構造的関係によって定義されるものである。というのは、これは明らかに地理学的調査の未開拓の領域だからである。

本論文の第2章では、都市モデリングにたいするハーヴェイのマルクス主義的アプローチが評価される。そこでは、「社会、都市、都市化の空間経済 Society, the City and the Space Economy of Urbanism」³⁾という論文が、社会と都市パラメーターおよび都市の形態と発展の変化しつつある構造的関係の間の多数の関連性に注目しているものの、幾つかの関係を明示的には扱っていないと主張される。特に、ハーヴェイは、性別間の構造的関係を扱っていない。修正した概念枠の特徴は、Hempelの「説明スケッチ (explanation sketches)」⁴⁾のひとつを用いることで、示唆されよう。

都市モデルはもちろん、社会変化への適切でない関心に加え、たくさんの理由から疑わしい。構造的関係が安定的であると仮定されるような短い期間においても、モデルがデータに適合するかどうかは疑わしい。

* 元ノースウェスタン大学 ** 関西大学・院

とはいえ、本論文は、理論を修正するための単なる別の、ひょっとすると余計な、理由を提供しない。それは、新しい種類の事実、すなわち進行中の社会変化だけに起因させることができる都市成長のタイプを指し示しており、理論構築と検証の通常の手法がこれほど切り離してこなかったものであり、さらにそれが説明力と予測力を改善するというのであれば、修正されたモデルの中に含まれなければならない。本論文はこのように、現在の諸モデルにたいしてのみならず、都市地理学におけるモデル構築のための主要なパラダイムにたいしても疑問を投げかける。そして、本論文の短い最終章では、当該事例におけるパラダイムの欠陥の理由を検討し、ひとつの改善された方法論的オルタナティブを提案する。

1. 4 種類の都市モデルの短評

(1) 「所与の条件 (Given Conditions)」と「構造関係 (Structural Relations)」

4 種類の都市モデルの簡単な検討から、こうしたモデルが社会変化および社会に占める女性の地位を適切に扱っていないことが明らかとなる。選ばれた事例は、西側社会において都市成長を「説明する」ために現在用いられる最も重要なモデルをかなり代表している。検討されるモデルはつぎの通りである。すなわち、通勤と買物行動に関する Wilson のエントロピー最大化モデル、都市地域の成長に関する Forrester のシミュレーション・モデル、Nourse による都市の土地市場のアロンゾ＝ミュース (Alonso-Muth) モデルの定式化、および、Berry and Rees によって構築された因子生態モデルである⁹⁾。わたしたちはとりわけ、モデルを成り立たせるために必要な「所与の条件 (given conditions)」、および性別間の「構造的関係」の明示的ないし暗黙の取り扱いに注目する。「所与の条件」は、原典において常に明確に定義されているわけではない。これは、驚きとはいえ、それらと、性差別主義・資本主義社会における一連の構造的関係のあるひとつの状態との結びつきは不明瞭である。現在の性役割に関連した諸側面は、「前提 (givens)」にとっての十分条件を形成することが時々ある。都市の土地市場モデルにおいて、土地は私有の下にあり、買物という務めは、核家族の領域の内部における家事や育児とともに女性に割り当

てられ、そして付随する大部分の他の仕事の務めが男性に割り当てられている。また、買物トリップは、自宅を発地として常に行われると仮定されている。同じことが、Wilson のモデルにも当てはまる。そして、都市成長をシミュレーションするための Forrester のモデルは、労働力を失業状態として処理する経営者対労働者対失業者の「人数比」という形の、単純な「前提」を含んでいるだけでなく、先と同様に核家族を仮定している。また、性別間の伝統的な分業を持った、家父長制的核家族から構成された社会というこうした軽率な仮定は、因子生態研究にも満ちあふれているように思われる。したがって、Berry and Rees は、次のように述べている。「都市住民は、根本的な意思決定に直面している。すなわち、住む場所の決定である。その主たる決定要因には、次のものがある。居住地選択を行うその個人の属性、彼が住宅に支払うことのできる金額（これは彼の所得に依存している）、彼の住宅ニーズ（これは彼の配偶関係と家族規模に左右される）、彼のライフ・スタイルの選好（これは彼が望む隣人のタイプに影響を及ぼす）、そして最後に、彼の職場の位置」（強調は、筆者が加えた）。

(2) 社会変化の扱い

モデルを、「所与の条件」、そして社会の構造的関係の状態と関連させるという行為は、先に例証されたようなモデルが、所与の条件を定義するためある期間だけに関するデータを用いずに操作化されるのであれば、些細なことだろう。しかしながら、諸モデルを操作可能にし、したがってあらゆる現実世界の都市の抱える諸問題に適用可能にする唯一の方法は、ある時点においてその所与の条件を記述するための数値を与えるデータを収集することである。例えば、Wilson の小売立地モデルが適用可能となる前に、購買力の空間分布、すなわち居住地別の買い物客の分布に関するデータと、ある特定期間の彼らの可処分所得に関するデータを集めなければならない。所与の条件がこのやり方で測定された場合だけ、Wilson のモデルのパラメーター推定が行われ、操作され、結果を得ることができるといふわけである⁹⁾。

ところが、社会の構造的関係に生じる変化にともなって、各モデルの「前提」によって描かれる諸条件においても、短期ならびに長期的変化が言うまでもなく

生じている。例えば、「購買力の空間分布」は、短期および、もっと重要なのは、多様な階層の女性による賃金労働略への参加という長期的変化の両方から影響を受けやすい⁷⁾。したがって、都市成長の諸モデルは、短期だけの予測力と説明力しか持たないし、またそのはずである。ゆえに、それらは、進行中の社会変化の空間的影響を説明することができない。さらに、多数の都市地理学者は、現在、非常に動態的な社会・都市システムにおける長期的開発計画の問題にも都市モデルの適用を明確に望んでいる。このように、所与の初期条件と構造的関係の下での都市形態と都市発展の通常のモデル化に費やされた努力の度合いや精密さと、社会変化の過程、都市空間システムと都市成長のパラメーターの変動との関係をモデル化する際の努力のあいだには、明確な乖離が存在している。

この乖離は、先に例示した種類のモデルによって構造的変化を扱うという最も一般的なやり方を検討するならば、はっきりとする。一般的なアプローチとは、ある時点での初期条件の一つを選択し、明確ではない何らかの規則にしたがってそれを変更し、モデルの予測を修正することである。ウィルソンは、システム不均衡にたいする彼の対処においてこの戦略を支持しており⁸⁾、Forrester によるパラメーターの感度に関する評価でもしかりであり⁹⁾、また Nourse の場合にも、都市システムの複数の重心に対応するためにアロンゾ＝ミュース・モデルを再公式化する際にしかりである¹⁰⁾。このきわめてその場しのぎのアプローチは、通例、都市形態の過去の変化を説明するために、モデルを事後的に修正するという帰結となることが知られている。例えば、ナースによるアロンゾ＝ミュース・モデルの修正は、CBD が 60 年代中期までに全都市活動に関するアクセシビリティの単一の中心としてもはや重要ではなくなったという共通の観察に由来している。しかしながら、このアプローチは、事後的であるばかりか、奇妙なほど素朴であるため、都市システムにおけるパラメーターの変化は、「偶然に起きた」独立した出来事として見かけは認識される。これは本当はそうではないということ、そして、空間システムのパラメーターは社会変化の継続する過程によって生み出されるということ、この過程そのものがモデル化されるということを理解するために、社会学ないし歴史学の知識を要求することはめったにない。つまり、明確に必要と

されているものは、長期と短期の構造的変化と、それらが都市空間システムのパラメーターと矛盾する様式を記述し、説明するために、さらに別の理論を発展させることに努力をつき込むことである。

2. 都市モデリング (Urban Modelling) へのマルクス主義アプローチ

(1) 都市形態および発展に関するハーヴェイの論議

ハーヴェイの「社会、都市、都市化の空間経済」という論文は、この課題に果敢に取り組む、都市地理学における唯一の研究と思われる¹¹⁾。そこで展開されている「理論的な基本概念と方向づけ」は、カール・マルクスによって最初にあらましが示された、主要な史的生産様式とそれに関連する社会形態の発展である。「都市化経済を解剖するための便利な道具を我々に提供する」¹²⁾、ハーヴェイの「社会編成の三つのモデルの拡張」(平等主義、階級、そして層化)と、それらと機能的に結びつけられた経済統合の三様式(互酬、再配分、市場交換)は、『一八八四年の草稿』(1844)、『ドイツ・イデオロギー』(1856)、および『資本論』(1867)に起源をたどることができる¹³⁾。マルクスの理論が、社会変化と都市空間システムに及ぼすその影響の分析にたいして適切な出発点を提供するということは真実である。資本主義社会およびその時間的・空間的発展に関するマルクス主義者の分析は、相互に関連した変化があらゆる社会制度とその空間的表出のなかで生じる様相という問題にたいする唯一の理論的な努力であるように思われる。しかしながら、マルクスの原著のなかでは、どのように性別間の関係が最初に生じたのか、どのようにそれが生産と消費関係とともに発展していったのか、そしてそれは空間的諸形態のなかでどのように立ち現れるのか、といった問題は、明示的には公表されていない。マルクスの分析と事例は、圧倒的に、歴史を通じての男性のあいだの労働、生産および財産権の編成の変化という観点にある¹⁴⁾。マルクスが、彼の理論の出発点として、男、「か弱き女」、子供および奴隷の間の分業を有した家族の存在を仮定しているのは明らかなることのように思われる¹⁵⁾。してみると、マルクスないし彼の後継者たちにあつては、どのように性別間の最初の分業が生じたのかに関する説明、したがって現代の都市空間経済において

「剰余(富)の発生および搾取」の点から、どのように男性が支配的な地位を占めるに至ったのかについての説明、がまったく見られないことは驚きではない¹⁶⁾。このことは、都市の居住選択について扱ったハーヴェイの著作の第二部が、都市社会の一部の集団が窮乏化し、インナーシティに押し込まれるだけでなく、それらは男性世帯主を欠いた女性(老女、ないしシングル・マザー)を含み、そしてまた、社会の別の集団(夫と家と子供を持つ成人の既婚女性)が有給労働への参入を制限され、そして通例、郊外から離れたところにある都市のアメニティーにほとんどアクセスを持たないことを規定する、社会的条件の分析を含まない理由と思われる。必要とされるのは、1. 原始の人間による生存手段の生産条件の点から性差別主義の起源を説明するためにマルクス主義理論を拡張すること、2. 生産関係同様、マルクス主義の立場から、都市空間経済における現代の表出に至るまでの性差別主義の社会的変化の過程をたどること、3. 未来にまでその分析を拡張すること、である。これは明らかに、桁外れの知的作業であり、本論文ではそれにたいする初歩的な取り組みがなされるに過ぎない¹⁷⁾。

わたしたちは、性差別主義の起源を説明するためにマルクス主義理論の拡張だけに専念する。これは本筋から外れるように見えるかもしれないけれども、「性別間の社会的分業」、「男性支配と女性の抑圧」、「権力の男性心理学(male psychology of power)」という三つの重要な概念を描き出す。こうした概念は、近代都市社会において変貌を遂げつつある性別間の構造的関係と、現在および将来の都市システムに及ぼすその影響を説明したり予測するための理論的基盤となる。こうした概念の有効性は、オーストラリアのシドニーにおける都市成長と女性の地位の間の関係を分析する別稿において示すつもりである。

(2) 性差別主義と権力

性差別主義は、人口集団の中の生物学的な差異に起源を求められることが圧倒的に多い。例えば、Firestoneは最近、生物学的な差異の点から、現代の都市社会における男女間の構造的関係を説明した。彼女は、産児制限が出現する以前の時代の、生物学的に規定された、絶えざる出産と育児を、女性の男性にたいする従属の起源とし、この結果、あらゆる社会において「女性の

仕事」としてこれらが退けられるその起源であると指摘する¹⁸⁾。しかしながら、彼女の主張は混乱している。男性と女性は、再生産を司る器官の点で生物学的に異なるものの、社会が原始の時代から女性は絶えざる出産と絶えざる育児に携わるように編成されてきた理由はなぜだろうか。節欲、妊娠中絶、および幼児殺しのような産児制限の諸形態を発展させ、社会的に合法化し、維持するための刺激が存在しなかったのはなぜだろうか。産児制限の先進技術(ピル、吸引中絶法)は、商品生産の先進技術と比べてそんなにも発展が遅れたのはなぜだろうか。保育と育児は共同で組織化されて、男・女が混ざった人々に委ねられなかったのは、なぜだろうか。

こうした疑問にたいする答えは、原始時代における「生存手段」(必需品)を生産する諸条件に関するマルクス主義の分析によって示唆されているように思われる¹⁹⁾。ここで、わたしたちはすでに広く流布している多数の観念に依拠する。というのも、初期の人類史に関するマルクス主義の分析は、文化地理学の伝統であるからだ。

史的唯物論の観点、すなわち男性の理念、見方、概念(社会関係)はその物質的存在条件の変化とともに変化するという観点は、社会学者による承認なしに(そしてしばしばその起源についての知識を欠いたまま、(たいていは)受け継がれてきた²⁰⁾。

農業が始まる以前の時代には、2つの「生存手段」、つまり野性状態のなかにある食料と、人口が非常に小さくて他の種にたいして無防備だった時代に、野性動物や時には他の人間からの防備のサーヴィス、が最も重要であった²¹⁾。小集団ごとの人類の組織は、食料を獲得し防備を提供するという両方の必要性にたいする明白な反応である。小集団は、食料の確保と個人の防備の効率性と移動の容易さを結びあわせる。主要な仕事は次のとおりである。1. 食料採集。2. 狩猟。3. 食料生産を最大化し、危険を最小化するために良く知っているテリトリー(土地)の獲得および防備。4. 人口を徐々に増やし、近隣の諸テリトリーに「友好的な」諸集団を配し、より高度の共同体的な食料生産および防備(氏族ないし部族)を創出するための、子供の出産と子育て。5. その集団のテリトリーが、敵ではあるが他の集団と生産のためのテリトリーと境界を接している場合の奴隷の獲得、そうすると戦争による集団規模の拡大は、生産のためのテリトリーの増加、

戦士階級として奴隷を用いる可能性、および食料供給への人的脅威の減少を上回っていた²²⁾。

十分に小規模な原始集団に必要な仕事の卓越的な特徴は、そうした仕事を行うのに必要な身体能力と攻撃性の度合に応じて二分されることにある。一方では、体力と攻撃性（野性動物と和平交渉はできない）を必要とする、狩猟、テリトリー、奴隷（財産）の獲得と防備といった仕事が存在し、他方では、そうしたものを必要としない食料採集、出産と子育てが存在した。もちろん、女性は平均すれば、男性よりも常に体力が劣り、攻撃性への傾向が弱いことの根拠がある。そしてそれらは、性別間にみられる数少ない詳細に記録された二つの生物学的差異である²³⁾。しかしながら、性別間の認識しうる平均的な生物学的差異は、原始時代に支配的であった諸条件のなかで、体力と攻撃性に基づいた性的分業を生み出すに十分なだけだろう。性差によって明確に規定され、厳密に固定された仕事の専門化の進展は、肉体的生存が不安定な環境にあっては、生存の不安定さを軽減するだろう。

これこそが、男性を戸主とし、男女間の近代社会における社会的分業、そして財産と富の積極的な蓄積者としての現代の男性の役割を持った近代の家族の起源なのである。しかし、この結論は、さまざまな生産条件が体力と攻撃性の能力に基づく分業を必要とする度合に鑑みて、異なった社会における性別間の多様な関係の説明によって立証化する必要がある。古典的なマルクス主義的分析の多くは、窮乏や貧困を除去するための富の蓄積の史的過程、知的技能と機械が身体能力に置き換わる分業の進展、および人間の生存を脅かす自然の脅威にたいする技術的支配の高まりに関しては、言うまでもなく妥当である。実際、マルクス主義理論が、こうした点において富裕層と貧困層の間の多様な諸関係についての説明をすでに供給してくれているので、以下の述べる大雑把な分析は、現代都市社会にはっきりと見て取れる基本的な階級と地位の関係の展開を説明するであろう²⁴⁾。

(3) 「支配」、「抑圧」および「権力の心理学」

不均衡な身体能力と攻撃能力に基づく分業による社会集団の編成は、文字通り、不均衡な権力を基盤とする編成である。原始時代における生存の条件は、性別によって社会的に割り当てられ、受け継がれた役割と

いう結果をもたらし、男性は、（他の個人的な能力が何であろうと）きわめて活発で、攻撃的で、習得的な行動の諸形態を示すことを習び、女性は、（他の個人的な能力が何であろうと）、受動的で、従順かつ養育する行動の諸形態を示すことを習得する。Russell や、Millet、エンゲルス²⁵⁾、その他の人々は、こうした権力諸関係が持ついくつかの形態の起源、すなわち、女性を支配（抑圧）する支配的な男性集団という形で、性別間の攻撃性—従属関係が制度化されるさまざまな社会的様式の起源をたどった。

現代都市社会が性的分業と男性支配を伝達する、深く根差された社会様式のひとつは、権力の心理学を通じたものであり、それは、「正常な(normal)」核家族内の男児によって習得される。ファイヤーストーンによるその過程のフロイト的分析の紹介を以下で手短かに述べておこう²⁶⁾。（彼女の紹介は、社会心理学者と臨床心理学者たちも認めている性役割の習得の標準的モデルと矛盾しない）²⁷⁾。

幼児の欲求は、母親による世話によって満たされるので、通常男児は、6歳まで女性に同一化している。実際彼は、母親を活発に求める。しかし、6歳くらいになると、彼は、「節度を守り」、「小さな紳士のようにふるまい」始めるように期待される。彼は、あまりなじみのない人である父親と同一化することを期待される。子供は、彼の自己同一化を逆転させ、「女の卑しい狭い生活」と対比して、父親が「思考の世界、人間が造り上げた法と秩序の世界、訓練、旅と冒険の世界」を象徴するというだけの理由から、母親への深い情動的愛着を「抑圧」するだろう。彼が愛する母親を拒否しなければならないこと、そして彼女の世界が劣ったものであることを知ることは、彼がそれを変えるには力不足であるときに、深い敵意を喚起する。そして、この情動は、まず競技と論争を通じて、ついで労働および戦争を通じて、彼の属する階級や文化の成人男性に適った攻撃性と支配の形態を習得すること向けられる。

この分析は、異性愛および、「正常な」男性の攻撃的かつ、競争的、習得的行動が、6歳頃まで男児には表面化しないだけであるということを示唆している。それはまた、「正常な」成人男性の「権力の心理学」を作り出すには、女性をおもに劣った従属的な養育者であり育児者とする、男女間の社会的分業を必要とす

ることも示唆している。しかしながらわたしたちは、この性的分業が食料不足の状況と身体の安全に関する日々の不安の結果として最初に社会的に割り当てられたのだらうということを手で述べた。当然の結果として、「権力の男性心理学」とそれに付随する行動（例えば、都市不動産の付け値）は、豊かさや身体の安全の最近の高まりや多様な性的分業に極端に影響を受けやすいかもしれない。

(4) マルクス主義理論の再評価

性差別主義の起源に関するマルクス主義の概略を示す試みは、伝統的マルクス主義理論の主目的からずれていることは明白である。わたしたちはもはや、現代社会の移ろいゆく構造的関係を、性（あるいは人種）によって識別不可能な都市の特権階級による物財の産出、蓄積、および配分の点からだけで説明しようとは思わない。むしろ、わたしたちは、家族内での児童の「正常な」成長を通じて維持され継承される、社会的に考案された権力関係の点から、ひとつの可能な説明を示す。それは、性別役割を習得する上での児童の心理発達、支配的な成人男性の攻撃的な行動によってあらゆる側面——都市内における「資本家」と「労働者」間の富と所得の配分を含む——において統制された社会を生み出し、永続させる、ということを意味している。さらに、社会の継承に必要な心理発達の過程を「正常な」ものとして社会が受容することは、観察可能な生物学的な差異のみを基礎として下位集団に対して劣った地位を与えられるであらうという考え方を正当とみなし続けるか否かに左右されることも意味しているのだ。

本論文は、性別間の多様な構造的関係だけでなく、家族によって伝達される「権力の男性心理学」の結果として、人種および社会・経済的階級間の多様な構造的関係をも説明することができる理論の発展に注目した。この心理学（例えば、都市不動産市場の競争入札）によって、生み出された行動の点から、現代都市空間システム全体を概観することは大雑把に過ぎることはないだろう。

この種の説明は、マルクス主義の歴史解釈が無視していると批判されてきた、「権力にたいする剥き出しの熱望」を考察する道を開くだろう。それはまた、例えば、所有権や所得配分の変更それ自体が、現代の都

市の「階級的不平等」を「解消する」ための十分な解決策となるという考え方のような、都市の社会病理にたいする台頭しつつある処方箋に関する陳腐な見方を見直す道を開くだろう。本論文の分析は、階級、人種および性別の「不平等」の解消が、現代都市システムにそれらの表出とともに、「権力の男性心理学」の「解消」によってもっとも促進されることを示唆している。さらに本論文は、豊かな都市産業社会が許容している性別間の分業、財産および所得の分断の変更なしには、これは達成できないということも示唆している。

3. 結び

著者はもちろん、本論文が推論的で記述的かつ未熟であることを十分認識している。けれども、それ以外のやり方では書けないだろう。現代の都市空間システムのパラメーターにおける変化を予測するために、社会発展と長期的な制度的変化に関する理論の開発にたいする都市地理学者（あるいは他の人々）による努力は事実上ほとんど存在しなかった。都市成長および都市計画への今日の莫大な投資の両者に関する説明が、わたしたちの多様な都市の世界と過去の社会をたんに固定化するものでないならば、この作業は緊急を要すると思われる。

残されている疑問は、都市地理学におけるモデル構築およびモデル検証のための主流のパラダイムが、本論文によって提案された方向へと進んでこなかったのかの理由である。現在の方法論は、厳密な論理的経験主義 empiricism（実証主義 positivism）のそれであるように思われ、それは既知の過程（所与の条件）から得られる予測を検証し、予測が事実の観察と食い違うまで、その過程を保持することを強調する...「ある理論を変更する唯一の理由は、事実との食い違いである。両立しないオルタナティブ（過程とその主張）に関連する検討は、そうではない。この場合、適切な事実の数を増やすのは、正しい手続きである。しかし、事実には適っているが両立しえない別の理論の数を増やすことは、正しい手続きではない」²⁸（括弧内、筆者）。

けれども、事実に基づく観察によるモデルの棄却は、不十分なデータや不完全な測定と統計的検定のために、社会科学においてはきわめて困難である。それゆえ、厳密な論理的経験主義的アプローチの良く知られた危

険のひとつは、誤った仮定あるいは不完全に定義された過程から導かれた予測を持つモデルが長期にわたって支持され、政策立案者によってさえ用いられるという点にある。けれども、もっと重要であるにもかかわらず、あまり知られていない危険が存在している。そして、この点は、厳格な論理的経験主義にたいする Fyerabend の最近の昨今では有名となった批判のなかで指摘されており²⁹⁾、本論文でも例証されている。モデルの検定のための論理的経験主義者の手続きは、最初のモデルに疑問を投げかけるだけに過ぎないような仮定とそこから導かれる結論のこれまで明確にされていない別の組み合わせを見つけたことを拒否している。「事実と理論は、許される以上に密接に結びついている」…ひとつひとつの事実の記述は、何がしかの理論に左右されるだけではない。(もちろん、その理論は、検証されるべき理論とは似て非なるものである)。検証されるべき理論のオルタナティブの助けなしには成立しえず、そのオルタナティブを排除するやいなや手に入らなくなる事実も存在する。検証と経験的内容に関する疑問を表明する際に、我々が言及しなければならない方法論上の単位は、部分的に重なり合って事実の点では適切ではあるけれども、互いに矛盾した理論の総体によってより豊かになることを、これは示唆している³⁰⁾。

このようにファイヤアーベントは、お粗末なモデルを棄却するには本質的に欠陥のある手続きが必要であるという理由から、厳格な論理的経験主義的アプローチの拒否を提案する。

本論文の事例においては、都市成長モデルの構築と検証における論理的経験主義的アプローチの広範な採用は、多様な社会の構造関係と都市空間システムのパラメーターに及ぼすその影響に関する理論を構築するのを阻んできたように思われる。この理論は、都市形態と都市発展に関する多くのマルクス主義および正統的なモデル(例えば、先に検討したようなモデル)との重なり合いを示している。また、都市成長モデルの予測を疑わしいものにする結論も示している。さらに、ある類の事実—たとえば性別間の関係の変化によって生じる空間的変化—が、都市に関する現在のモデルの中には含まれないことを示すことによって、理論としては粗いけれども本論文のような別の理論がなければ、現行のモデルを修正する方法は発明され得なかったこ

とも示している。

それゆえ、本論文は、変化しつつある社会構造と都市空間システムのパラメーター変化の間の関係が明確に定義されるまで、都市成長の諸モデルが、さし迫った社会問題や都市問題にたいして、馬鹿げた不適切な、あるいは危険でさえある答えを生み出し続けるだろうということを主張するにとどまらない。また、都市地理学にたいする厳格な論理的経験主義アプローチを拒否すべきという主張も支持する。そして、都市成長のすぐれた説明と予測のために、重なり合った仮定からオルタナティブなモデルや論理を構築することに注目する必要がある。もちろんこれは、観察と測定の手段を扱う能力を発展させるのと同じように、都市地理学者の洞察力、思索、勇気、創造的想像力、人間への共感を重視するだろう。すなわち、「議論の中心に位置している見方に加えて、オルタナティブの創案は、科学的経験主義的方法の本質的な部分を構成する」³¹⁾。したがって、形而上的観察とかつ公平な観察の両方が、都市科学そしてあらゆる科学における手続きの核心にあつてしかるべきである。

注および参考文献

- 1) 性差別主義社会は、一般には、一方の性の人間が他方の性の人間に従属するところのそれである。Kate Millet は、*Sexual Politics*, New York, Avon Books, 1971, pp.1-58 (ミレット, K. 著, 藤枝滯子ほか共訳『性の政治学』ドメス出版、1985)において、近代都市社会における女性の男性への従属の諸形態を論じている。また、J Mitchell, *Womans Estate*, London, Pelican Books, 1971 も参照のこと。米国というひとつの社会における男性への女性の従属の度合の測定法については、AL Ferris, *Indicators of Trends in the Status of American Women*, New York, Russell Sage Foundation, 1971 にある。また、*American Journal of Sociology*, 'Changing Women in a Changing Society', (ed) J Huber, 78, 4, 1973 の特集も参照のこと。
- 2) 性別間の構造関係の変化の例については、以下を参照のこと。AL Ferris, 前掲, pp.59-233; K Millet, 前掲; AD Gordon, MJ Buhle and NE Schrom, *Women in American Society: An Historical Contribution*, Radical America reproduced from Pamphlet Radical America, Vol 5:4, 1971; ed AF Scott, *The American Women: Who Was She?*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, 1971; J Mitchell, 前掲, pp 19-98. 米国およびスウェーデン政府は、性別間の長期的な社会的不平等を是正する幅広い法律を制定中である。また、他の政府(カナダ、英国、オーストラリアおよびニュージーランド)は、女性の地位を再

- 検討し、いくつかの分野、とくに同一賃金や中絶法の改革を始めている。
- 3) D Harvey, *Society, the City and the Space Economy of Urbanism*, Association of American Geographers, Commission on College Geography, Resource Paper Number 18, Washington DC, 1972. 注: 同じテーマを(第5および6章において)取り扱っている D Harvey's, *Social Justice and the City* (ダヴィド・ハーヴェイ著、竹内啓一・松本正美訳『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ、1980)は、本論文の脱稿の後に出版された。
- 4) 「…説明スケッチは、適切と考えられる法則と初期条件の多かれ少なかれ曖昧な指摘から構成され、そして完全な説明へと変えるために、『補強 (filling out)』を必要とする。」CG Hempel, *The Function of General Laws in History*, *Journal of Philosophy*, 39, 1942, p42.
- 5) AG Wilson 1970 *Entropy in Urban and Regional Modelling* Pion, pp15-25 and 65-66; JM Forrester 1969 *Urban Dynamics* MIT, p. 37 (フォレスター, J. M., 小玉陽一訳『アーバンダイナミクス』日本経営出版会, 1970); HO Nourse *Regional Economics* McGraw Hill p. 93 (ナース, H. O., 笹田友三郎訳『地域経済学』好学社, 1971); および B.J.L. Berry and P.H. Rees 1969 'The Factorial Ecology of Calcutta' *American Journal of Sociology*, 74, p. 460. (注: こうしたモデルを取り扱った段落は、土壇場になって変更されねばならなかった。というのも、著者の原稿中の図表を活字に組み立て生じた問題のためであり、このために議論の趣旨が変わったとすれば著者と読者に深く陳謝いたします—編集)。
- 6) 例えば, TR Lakshman and WG Hansen 'A Retail Market Potential Model', *Journal of American Institute of Planners*, 31, 1965, pp 134-143.
- 7) 長期的傾向は、労働者階級および中流階級の女性の双方についても都市産業社会におけるサービス職への移行である。なお、以下も参照のこと。例えば, VC Oppenheimer, 'Demographic Influence on Female Employment and the Status of Women', *American Journal of Sociology*, 78:5, 1973, pp 946-961; Australia, Department of Labour and National Service, *Women in the Labour Force*, No.9, October 1970. D Bell, in 'Labour in the Post-Industrial Society', *Dissent*, Winter 1972, p.178. 労働力参加の高まる傾向が続いていることも注目されたい。また、Ferriss, 前掲, pp 108-114 も参照のこと。
- 8) AG Wilson, 前掲 pp 115-121.
- 9) JW Forrester, 前掲 pp 227-237.
- 10) HO Nourse, 前掲 pp 117-125.
- 11) D Harvey, 前掲、特に pp 1-2.
- 12) D Harvey, 前掲, p 7.
- 13) K Marx, *Economic and Philosophic Manuscripts of 1844*, (K. マルクス『一八四四年の草稿』) Moscow, Foreign Languages Publishing House, 出版年不詳; K Marx and F Engels, *The German Ideology* (K. マルクス・F. エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』), Parts i and iii, Marxist Library Vol vi, New York, International Publishers, 1939.1. Ideology in General, German Ideology in Particular (「イデオロギー一般、ことにドイツの」) (a) History (「歴史」); pp 4-272. The Real Basis of Ideology (「イデオロギーの現実的土台」) a) Intercourse and Productive Power (「交通力と生産力」); pp 43-69; K Marx *Capital* (K. マルクス『資本論』), New York, Random House, Modern Library edition, 出版年不詳.
- 14) 参照、特に、K Marx, *Capital*, throughout.
- 15) 参照、特に、K Marx, *German Ideology*, 前掲, pp. 7, 8, 9, 20, 21. 「ちょうど労働の分割のさまざまな発展段階の数だけ所有のさまざまな形態がある…所有の最初の形態は部族所有である。これは人々が狩猟と魚撈で…食っているような生産の未発達な段階に対応する…労働の分割はこの段階にあってはまだまだほとんど発展しておらず、家族のなかでおこなわれている自然発生的な分業をもっとひろげる程度にかぎられる。それゆえに社会的編成は家族の延長以上には出ていない。すなわち家父長制的部族長、そのもとに部族員、最後に奴隷」[p9 (マルクス=エンゲルス著、真下真一訳『ドイツ・イデオロギー』大月書店, 1965, 44-45頁)] (強調は筆者による)。
- 16) たとえばマンデルは、最初の分業として性別間の分業を認め、これが剰余の形成に先立って生じると記している。しかしながら、彼はマルクス主義の観点からこの分業を説明しようとしていない。(E Mandel, *Marxist Economic Theory* (マンデル, E. 著, 岡田純一ほか共訳『現代マルクス経済学』1-4, 東洋経済新報社, 1972-74), Vol 1, London, Merlin Press, pp 24-37). 家族の起源についてのエンゲルスの議論 (*The Origins of the Family, Private Property and the State* (『家族・私有財産・国家の起源』), International Publishers, New York, 1972) は、疑問視されている。Kate Millett, 前掲, pp 108-127 は、主要な批判に関するかなり長い要約を提供しており、つぎのように結論づけている…「…結婚における男性の女性にたいする独占的な性の所有の確立によって、女性が動産と化したと彼は信じたが…このことはすでに父権性的事態を前提としている」[ミレット, 208頁 (p197)]。
- 17) 女性歴史家のなかには、特定の諸国の資本主義システムの発展における性差別主義のさまざまな形態を明らかにしようと試みている者もいる。Gordan, et al, 前掲, Mitchell, 前掲, および M Benston, 'The Political Economy of Women's Liberation', *Monthly Review*, 21, 1969 を参照のこと。
- 18) S Firestone, *The Dialectic of Sex, The Case for Feminist Revolution*, New York, Bantam Books, 1970, pp 1-14 (ファイアストーン, S. 著, 林弘子訳『性の弁証法: 女性開放革命の場合』評論社, 1975)。
- 19) 以下の分析は独自のものであって、私を知る限り、必ずしも自明ではない。もちろん、社会主義者の書き手は、原始時代の生産条件をよく知っている。例えば、Mandel, 前掲を参照されたい。農業に関わる重労働のための身体能力を欠くことが分業の起源であるが、女性はこれ以前に育児に割り当てられていたことを問題として取り上げる者もいる。Mitchell (前掲, p 103) は、「…歴史的に、女性の従属を決定づけたのは、労働に関する能力と同様に、女性の暴力の劣った能力

- であった」と考えているが、どのようにして労働の起源が生じたのかをマルクス主義者の観点から追及してはいない。
- 20) PM Sweezy and L Huberman, 'The Communist Manifesto After 100 Years' in K Marx and F Engels, *The Communist Manifesto*, Monthly Review Press, New York, 1964, p 99.
- 21) ハゲットは、農業が開始される直前になってさえ、人口は500万人を超えるものではなかったと見積もる。(P Haggett, *Geography: A Modern Synthesis*, New York, Harper and Row, 1972, pp 300-301)。発達心理学者たちは、野獣からの防御はきわめて重要であり、人間による環境の認知と構造化に永続的な影響を与えたと主張している (S Kaplan, *The Challenge of Environmental Psychology: A Proposal for New Functionalism*, *American Psychologist*, 27, 1972, pp 140-143)。
- 22) 原始人の社会組織がこの種のものであったという確実な証拠がある。例えば、R Ardrey, *The Territorial Imperative*, London, Collins Fontana Library, 1969; LT Hobhouse, et al, *The Material Culture and Social Institutions of the Simpler Peoples*, London School of Economics Monographs on Sociology, London, Chapman and Hall, 1930.
- 23) AR Hochschild, 'A Review of Sex-Role Research', *American Journal of Sociology*, 78:4, 1973, pp 1011-1029; 以下も参照のこと。'Male and Female, the Difference Between Them', *Time*, Special Issue, 'The American Woman', March 20, 1972. 「あらゆる文化において、調査者は、男児が女児よりもより攻撃的な遊びをする傾向があると報告するが、科学者たちはそれに生物学的要因が関与していると考えており、さらに彼らは、男性に攻撃性を容認し、女性に従順さを促すことによって、社会が差異を育むと主張している」(p. 44)。
- 24) マルクス主義者のなかには、例えばマルクーゼのように、今世紀中頃の技術と生産条件がいかにして人間の解放、すなわち男性の「性質」を変えるための基盤を提供し得るのかについてすでに述べている：H Marcuse, *An Essay of Liberation*, London, Penguin Press, 1969, quotation from p 5. しかしながら、いかなる種類の個人と社会変化が予想されるのかを考慮する進化論的分析が重要である。
- 25) B Russell, *Marriage and Morals*, London, Penguin, 1956 (ラッセル, B.著, 安藤貞雄訳『ラッセル結婚論』岩波文庫, 1996); K Millett, 前掲; F Engels, 前掲。
- 26) S Firestone, 前掲, pp. 47-52。
- 27) 例えば、T Parsons and RF Bales, *Family Socialisation and Interaction Processes* (パーソンズ, T., ベールズ, R. F.著, 橋爪貞雄訳『家族』黎明書房, 1981), Glencoe, Illinois, Free Press, 1953.
- 28) PK Fyerabend, 'How to be a Good Empiricist-A Plea for Tolerance in Matters Epistemological', in ed PH Nidditch, *The Philosophy of Science*, London, Oxford University Press, 1968, pp 12-39, quotation from p25.
- 29) PK Fyerabend, 前掲。
- 30) PK Fyerabend, 前掲, p. 27.
- 31) PK Fyerabend, 前掲。

なお解題については、タイバース論文末尾に一括して記している。